

会 議 記 録			
会 議 の 名 称	産業建設常任委員会・ 委員会協議会(意見交換会)	会議場所	全員協議会室
		担当職員	佐藤
日 時	令和3年5月26日(水曜日)	開 議	午前 10 時 00 分
		閉 議	午後 0 時 08 分
出席委員	◎赤坂、○奥野、田中、小川、藤本、木曾、菱田、(福井議長)		
出席理事者	【市長公室】山内室長 [SDGs創生課]篠部課長 【産業観光部】由良部長 [商工観光課]三宅課長、元古副課長、橋本主幹 [農林振興課]松本課長、荒美食農ブランド係長 【上下水道部】西田部長 [総務・経営課]木村課長、服部下水道経営係長 [お客様サービス課]野々村課長 [水道課]吉村課長 [下水道課]川勝課長		
出席事務局	加藤副課長兼議事調査係長事務取扱、佐藤主任		
傍聴者	市民1名	報道関係者0名	議員0名

## 会 議 の 概 要

1 0 : 0 0

### 【1 開議 (赤坂委員長あいさつ)】

[事務局主任より日程説明]

### 【2 案件】

## 【産業建設常任委員会協議会 (意見交換会)】

[保津川遊船企業組合・産業観光部入室]

### (1) 「川の駅 亀岡水辺公園」の今後の活用計画について (保津川遊船企業組合・産業観光部との意見交換会)

#### 1 開会 (赤坂委員長あいさつ)

<赤坂委員長>

本日はプロが考えられたアクティビティ等について、いろいろと勉強させていただきたいと考えるのでよろしく願います。

#### 2 開会あいさつ

(保津川遊船企業組合 豊田代表理事あいさつ)

<豊田代表理事>

川の駅亀岡水辺公園について、意見交換をできるよい機会だと思っている。保津川は亀岡にとって歴史も深く関わりが深い。特に流域の地域は生業に関係している川

でありながら、利水関係者やアクティビティコンテンツを行う会社にしか使われていない。しかしこの水運は1,300年前の、平城京の時代から都を支える水運として、また、一度も途絶えることなく現存する水運は、日本ではこの保津川下りしかない。そのような川があまり活用されていないことがもったいないと思っていた。今回、川の駅亀岡水辺公園が整備され、保津川の資源をしっかりと生かしていける新たな地域、再び水運や川を生かした施設になる非常に新しいチャレンジであると思っている。私たちもその視点でこれまで関わってきているので、踏み込んでお話ができればと考えるのでよろしく願います。

(亀岡市産業観光部長あいさつ)

<産業観光部長>

本日は、昨年度の川の駅亀岡水辺公園に係る桂川舟運歴史体験・展示施設河川アクティビティ等試行業務を委託させていただいた、保津川遊船企業組合に来ていただき、事業者の目線で施設の活用や事業推進についてお話いただく。先日、第2回川の駅亀岡水辺公園事業協議会を開催し、京都府や関係団体等と協議し、今後どのような事業を展開していくのかや、運営方法についてワークショップを行った。川の駅亀岡水辺公園が新たな観光の拠点、また地域活性化の拠点となり、よりよい施設整備・事業計画、今後の事業推進や運営等が図れるよう、いろいろと意見交換をさせていただきたいのでよろしく願います。

10:07

### 3 「川の駅 亀岡水辺公園」の今後の活用計画について

[豊田代表理事 説明]

<豊田代表理事>

建物の場所は、事業によって支えていく場所であると思っている。私たちは社屋を活用して、収益を上げているわけではない。保津川下りの事業で必要であるから社屋を使っている。川の駅亀岡水辺公園は、これまで観光ニーズのない場所である。観光ニーズのない千代川町で、新たに観光客やレジャー客を呼び寄せようとしているので、これから積み上げていくのに時間がかかる。最初は大きな事業ではなく、小さな事業から少しずつ積み上げていく必要があると考える。特にあの施設は小さいので、他市町村の川の駅と同じように考えては、収益事業にならないと思う。その場所のコンセプトから導き出され、どのような事業ができるのか、建物をどのように利用するのかまでしっかりと考えていかなければならないと思う。一言でいうと亀岡の特性をしっかりと生かして、そしてその特性と水辺をしっかりとマッチングさせて、稼げる場所を作るということである。これがないと、建物を維持することは不可能である。私たちも保津川下りの収益が上がらなければ、あの社屋を維持することはできない。まずは、収入を得る、稼げる場所を作ることから進めていく必要がある。そこには大きな柱である「亀岡の特性は何なのか」「なぜここに集まらなければならないのか」「ここでアクティビティをなぜしなければならないのか」「この水辺には何があるのか」というコンセプト、幹をしっかりと作らなければ、他の地域との差別化は図れないと考える。100台以上の車が停められて、管理棟があり、レストランや温泉、サウナがある川の駅はたくさんある。それらとはビジネスモデルが違うし、あの場所はそのようなビジネスモデルが当てはめられる場所ではない。そう考えると、この地域の特性、「ここで、ここに来てこの地域でやる」

ことに意味を持たせなければ、事業として成り立っていくのは、なかなか難しいと考える。まずはそこをしっかりと抑えて、ではそれに対して何をするのか。夏はアクティビティをすることは十分可能である。アクティビティのアイデアはいろいろある。ただ、アクティビティは季節性のものである。あの建物は宿泊施設でもないし、レストランもないので、あの建物をどのように有効利用していくのか。舟運歴史体験・展示施設だけで賄えるのかといったところをしっかりと踏まえた、その建物自体の有効利用も考えていく。もちろん夏のシーズンオフをどのように使っていくのかもしっかりと考えていく必要がある。このようなコンセプトでしっかりとした幹を作って、考えていくことにより施設の色が出てきて、他の地域との差別化が図られる。

協議会を設立したときも、テーマとして「川・水・清流」というイメージをしっかりともち、「歴史・文化」という、この保津川がどのような川であるのかをしっかりと考える。このことは、絶対に外せないので、協議会を作るときには、そこに特化したメンバーを選出した。世界的企業であるパタゴニアの日本支社長やプロジェクト保津川、地球環境子ども村等、環境の柱をしっかりと出し、SDGsの取組の中で、川はどのような位置づけにあるのか、どのように見せていくのか、見せた川をどのように皆さんに利用していただくのか、引きをどのように作っていくのかが協議会でも大きな柱となっている。

また、歴史・文化においては、水運の歴史、アクティビティが今の時代に1,300年続いたかだ、船、ボート、チュービング等新たな川の遊び等、全時代をまたいで遊ぶ遊びをしっかりと作っていく。そのときに、王道を攻めなければならないと考える。小手先の新しいものを取り入れても、うけないと思われる。皆さんが保津川・清流と聞いて、ぱっと浮かぶものが王道である。川で遊びたいと思ったときに、

「足をつけたい」「石を掘りたい」「石を積み上げたい」などがあると思う。これが王道の分かりやすさであるし、ではこの王道をどのように体験してもらえるのかが夏のアクティビティである。今亀岡市で取り組んでいるSDGsと川がどのように関連しているのかを情報発信できるようにしていきたい。

もし、BBQやキャンプをするのなら、他にどこにもやっていないような、環境をテーマにこだわった新しいものをすることによって、顧客の固定化ができると思う。ファン層を作り上げることができれば、小さい施設であるがしっかりと維持管理していくことができるようになる。何をするかアイデアはたくさん出てくると思うが、その柱をしっかりと作っていくことが大事である。

<赤坂委員長>

コンセプトについて、どのようにしていけばいいのか。まだまだ整備をかなりしていかなければ、いろいろなアクティビティができないと思う。どのような形で今後やっていけばいいのか教えていただきたい。

<豊田代表理事>

キャンプやBBQを考えたときに、近隣住民とのコミュニケーションが絶対に必要であると考えます。住宅地に近い場所で、全くの見ず知らずの人がキャンプやBBQをしに来られる。それを考えると地域住民とのしっかりとしたコミュニケーションが必要になってくる。また、地域の方と一緒に考え、地域の方から、交流ができるよい提案を拾い上げていくことが必要であると思う。

川の整備については、保津川下りの船が120年前ぐらいには、千代川町を流れていた。もともと船が流れる特性はあるが、120年も使っていないので木工沈床等

水寄せと呼ばれる工作が全部潰れており、平川になっている。昨年冬に、平川を少し下げて、ボートを浮かべられるくらいの浮力の道は作っている。保津川遊船企業組合がもっている独特の工法で作っている。川をユンボで掘っても、川が浅いので上流で溜まっている水が下流に全部流れてしまって、上流が浅くなってしまう。浅瀬ばかりになり、ものを浮かべることや運ぶことは不可能になる。ではどうするかというと、一部水をためて、高台の河原は残したまま、一部のルートだけを下げる。または、水を寄せてくることで、水路を作ることによって上流のたまりはキープして、ならしていけるコースを作る。これが、水路の作り方として、代々教わっていることである。踏み込むことは必要であるが、掘ることは必要でない。踏み込んだところにしっかりとした水路を作る仕掛けをしていく必要がある。これがやはり、1回作っただけでは、今回の大雨で少し堀戻しされている可能性がある。もう少し水が減れば、調査に行く予定である。少し年数をかけて、形作りをしていく必要があると思っている。そのような川の整備が必要になると考える。ただ、ボートは下るだけが役割ではないと考えるので、上流の深さを利用していろいろなアクティビティができる。そこと並行して、川作りは年数をかけてしていく必要があると思うので、これからも調査が必要である。

10 : 20

### [意見交換]

<赤坂委員長>

豊田代表理事の意見を聞いて、何か質疑等はあるか。

<藤本委員>

コロナ禍で大変な中お越しいただき感謝する。あの場所は住宅地も近隣にあるが、稼げる場所にしていくというコンセプトをお聞かせいただいた。委託先はまだ決定していないが、例えば、船を千代川町から保津町まで流すとすれば、船頭は足りているのか。また、船ではなくボートやラフティング等を流すとすれば、保津川遊船企業組合が管理されるのか、それとも、他へ管理を委託するのか。

<豊田代表理事>

私たちが管理をするとなったと想定して、お話をさせていただくと、最終目標はいかだを含めて、舟運の復活をしていきたいと考えている。あそこは、平川なので船頭は3人も必要ではないと思う。今の大きな船を使うかどうか、航路の関係で変わってくるし、もう少し小ぶりの船でもよいと考える。そうすると1~2人でも動かせるかもしれないし、何隻用意できるかもシミュレーションしていきたいと考える。単価もどのぐらいになるのか経費を考えて逆算していく。

現在、ラフティングについては、川の駅亀岡水辺公園で行う、エコロジカルラフティングの企画を旅行会社に作っていただいている。修学旅行や研修等をメニューにしているが、1回で300人ぐらいの人がラフティングをしようとするれば、ボートが30艇ぐらい必要になるので、当然保津川遊船企業組合だけではさばけない。そこは、他のラフティング会社とシェアしようと思っている。お互いがシェアすることで、ラフティング事業は多くの人を呼ぶことができるようになる。現実にはコロナ禍の影響で、京阪神では、修学旅行に行かない代わりに、近場でレクリエーションという形で、200~300人単位の修学旅行生が保津川下りやラフティングを行った。中・高生には、アクティビティをしたいという需要が高い。私どもだけでは、インストラクターが賄えないので、他の地域から助けていただいている。そのよう

にフォローできるので、川の駅では修学旅行や研修での100人単位を超えるラフティングツアーをしっかりと取り込んで、保津川遊船企業組合とラフティング業者がシェアし合うという仕組みを構築することによって、この事業を十分賄うことができる。

<菱田委員>

昨年、当委員会からご無理を言って、ラフティング体験をお願いしていたが、増水のため、当時委員長であった私の独断で中止にさせていただき、ご迷惑をおかけして申し訳なかった。

先ほど代表理事がおっしゃったように、「そこにしかないもの」をどのようにイメージして実践していくかが、一番近道で分かりやすいと思う。私自身は川遊びを子どもの頃からしてきたので、川ガキ大将の復活を含めて、その体験から川に親しむ生活の一部になればよいと考えている。例えば、グラスボートを浮かべて、サンショウウオやモロコを見て、川で採れた魚や亀岡産の野菜でBBQをしてもらうというようなこともよいのではと思う。亀岡のよさは、自然の豊かさと水の豊かさだと思うので、母なる川で何を感じていただけるかをアピールするのがよいのではと思うが、代表理事はどのようにお考えか。

<豊田代表理事>

それは、ぜひメニュー化していきたいツアーであると思う。漁業関係者とも協議しており、アユを放流してアユのつかみ取り等ができたり、保津川の幸等を感じていただけるような取組をしていきたいとおっしゃっているので、そこを組み合わせれば、十分可能なツアーコンテンツになると考える。

<菱田委員>

以前、保津橋上流で、プロジェクト保津川が川と親しむ行事をされていたが、あのときに、いかだを組んで、いかだ乗り体験のようなことをされていた。川の駅から下流になると、比較的流れが緩やかであるので、そういったことも観光の一つのコンテンツとして可能ではないかと思うがどうか。

<豊田代表理事>

十分考えている。保津峡と上流の違いは、緩やかで安全であるということである。深みもそれほどないので、ライフジャケットを着て、安全のレクチャーをしっかりとしていれば、それほど危険な場所ではない。それを生かすことを考えなければ、保津峡との差別化は図れないと思う。保津峡は爽快感やわくわく感、渓谷のすばらしい景色を楽しまれる方が来られる。しかし、上流はそうではなく、千代川町から宇津根橋まで、何も景色が見えない。大きな川のど真ん中に、自分がぽつんと浮いているような感覚になる。この安全でゆったりと流れていくことを売りにしていかなければ、川の魅力は出せないと思っている。しかも、町に近いのに、町に近いというイメージがあな場所には全くない。異空間に来た感覚になるのは、あのエリアのすばらしい特徴である。ここでの取組は、アクティビティではなく、ヘルスツーリズムだと思っている。健康増進、心理的な癒し感といったそういうメニューがしっかり出せると思っているので、ボートやチューブを使ったコンテンツをやりたい。

<小川委員>

先日の千代川町区長会で、ご説明をいただき感謝を申し上げる。私も地元ということで、小さいときから、川に親しんできた。あの川の駅ができて現地に行ったときに、あそこから見る自然の景色をいろいろな人に見ていただきたいと感じた。川の駅ができると聞いたときに、川下りができればよいなという話が地元で出ていた。

私があったイメージは、小さい船を浮かべて、お弁当を食べながらゆっくりと景色を見ながら、舟下りができればと思っていた。修学旅行等で亀岡に来ていただいて、アクティビティを楽しんで、民泊等と連携して、農業体験をしてもらう等、1日亀岡で遊んでもらえるようなことができればと思う。

先ほどから出ているBBQ等は、近隣住民の方の中には、においや騒音等を不快に思われる方もおられるかもしれないので、川東側に行っていただいて、BBQができるような施設があればよいと思った。

#### <豊田代表理事>

それは、もちろん視野に入っており、川の駅を中心に川東または千代川町エリアに新しいイメージを作り上げたいと思っている。今、観光地のイメージが全くないので、新たに人を集客できるような、今までのような大きなツーリズムではなく、小さな着地型で地域を回ったり、サイクリングでつないでいたり、そういったルートをつないで作り上げて、民泊や農地体験、食を使ってもらうなど川の駅を中心としたパッケージ作りを考えていかなければならない。そうすることで、あのエリアを「波止場千代川」や「亀岡ワンダーランド千代川」など、新しいネーミングをして、新しいブランド名で川の駅エリアを作っていくためには、周辺の資源や施設、事業者と組むことは非常に大事である。それをサイクリングでつなぎ、山のほうに行けば、パラグライダーや気球も飛んでいる。そういったことを考えると、アドベンチャー的なツーリズムも考えられる。新しいアクティビティとつなげて、ワンダーランドを作っていく。川と自然を使った亀岡独自のワンダーランド構想のイメージを作らなければ浸透していかないと考える。そこには、地域の人たちのポテンシャルをまず上げなければならぬ。

鴨川沿いにある木工づくりの小さなカフェでは、椅子を鴨川沿いのどこの場所にも持って行って、カフェを楽しむことができる。このようなことを、川の駅でやりたいと思っている。あのエリアの風景を生かした場所を作っていきたいし、それを地元の方にやっていただきたいと思う。ここは大きな施設ではないので、大きなカフェがやってきてやるのではなく、地元でカフェやキッチンカーをやっておられたり、豆を作っておられる人にやってもらいたい。地元の方で盛り上げてもらうことによって、多くの人に知ってもらえることができるようになると思っている。そのためには、眺望を使ったいろいろなアイデアを考えていきたいと思う。

#### <小川委員>

イメージがよく湧いてきたと思う。千代川町や川東エリアでは、農産物を作っておられたり、朝市をやっておられたりするのので、それらと連携ができて全国から来ていただければと思う。また、平日の閑散時にはセラピー的なことができればと考える。

#### <木曾委員>

先ほどから、経営やアクティビティについて、いろいろお聞きしたが、私は建物そのものが何の役割をもってあそこに設置されたのか、当初疑問に思っていた。京都府が亀岡市に押しつけて、建物だけ渡して、後は勝手に運営してくれと言われているような内容である。2年間は300万円ぐらい補助金が出るが、長期的に出るかは疑問である。そう考えると、スタジアムができていろいろな相乗効果を出そうという京都府の考え方は分かるが、結果として地元や保津川遊船企業組合に負担を強いることになってしまうのではないかと感じる。いろいろなことをやろうとしても、事業費をかけなければならぬし、いろいろなところと提携していかなければならない。コンセプトを考えながら、中長期的に考えていくのなら企業として成り立つ

かもしれないが、そこまでの間はどうかという経営計画を含めてやっていかなければ難しいと思う。今ご苦労いただいているので、私は心配している。いろいろな発想を言っていただいたが、それだけで、あの場所で本当に集客できるのか。そして、あの建物を維持できるのか最大の課題である。あそこを整備して、一定のことができるまで相当な費用をかけていかなければ難しいと思う。あそこは、過去には水害の常習地でもあって、堆積した土砂がかなりあるがそれを撤去するのにも、京都府はなかなかやってくれない状況である。そのような中、亀岡のアクティビティを生かしながら、未来に向けて、どこかの事業所が管理・運営をすることになった場合に、事業所として経営が成り立つまでに、亀岡市がどれだけの支援をしなければならないのか分かる範囲で教えていただきたい。財源が必要になるので、しっかりと考えていかなければならないし、その上でどうあるべきか、観光・自然・歴史も含めて考えていく必要がある。本当に、優先的に亀岡の事業としてやっていけるのか検討していくべきである。後ろ向きではなく、やりたいという気持ちはあるが、それには財源や市民理解が必要となってくる。市民理解を得るために、どのぐらいの財源が必要で、どのような状況になるということを、市民に説明する責任がある。今分かる範囲で、昨年1年間、川の駅の維持管理をお世話になって、すばらしい発想と計画をおっしゃっていただいているが、現実の企業経営となるとそのように生易しいものではない。私も企業を運営していた観点から思うが、一たび、今回のようなコロナがあればこのような状態になる。川ということになれば、増水等がある。自然との兼ね合いの中でやってこられた、保津川遊船企業組合であれば、分かっていたいただいていると思うのでお話いただければと思う。

#### <豊田代表理事>

企業として考える場合、コストや固定経費がどのくらいかかるかをまずは計算する。そこから、流動経費等を入れながら、逆算して、観光コンテンツを考えて行く。もちろん川であれば、保津川下りの船が止まるリスクを何カ月で考えるか。それを、年間の事業計画の中からどのように補填するか。そして、観光マーケットの動向をしっかりと読み込んでいく等が本来の経営のやり方である。しかし、コロナ禍というと、全く読めない状況である。コロナ禍で川の駅を動かすのは現実的ではないので、コロナが収束した後に、本当に観光客は戻ってくるのかの動向を見ながら想定するしかないと思っている。私どもはまだ、その立場にはないので、そこまで緻密な計算はしていないが、だいたい人件費がどのくらいかかるのか、イベントを実施するごとにどのくらいのコストがかかるのか、365日稼働できるのか、150日以下か、もしくは120日なのか。しかし、アクティビティは多少の増水であれば、実施できる。これらを総合的に考えながら計画を立てていかなければならない。もちろん計画内容と単価をしっかりと出し、そのマーケットがあるかどうか図りながら進めていくことが大事である。1年間何も事業をしなかった場合に経費がどのくらいかかるのか、120日使ったとすれば、どのくらいかかるのか等を指定管理になるとすれば計算していきたいと思う。最終的には、船を流すとなれば、航路整備が大変になるので、難しいが、アクティビティを実施するには今のままでもできる。保津川遊船企業組合が、保津峡でアクティビティを実施したときは、年間で、1,000万円以上を売上げた実績がある。それは、保津峡であるからということもあるが、旅行会社との関連もあるので、計算しながら、川の駅をどのようなアクティビティの顧客に使うのかを考えて逆算していく。修学旅行や研修で、環境のエコロジカルなところで、ごみを回収したりごみ調査をする。学校であれば、修学旅行は今、探求型である。深く知りたいという学校はたくさんあり、探求型であれば単価

も高くなる。そのようなツアーに取り組み、マーケットをしっかりと絞って、いろいろなイベントができると思うが、柱になる事業は何かをしっかりと考える必要があると思う。私どもが施設を管理・運営していくのならこのように考えるし、事業を運営していただくのであれば、施設をお借りしてやっていただくだけである。そのように、立場によって考え方は違ってくると思う。シミュレーションとしては、どちらも考えておくことだと考える。

<木曾委員>

キャンプやBBQは、はっきり言って住宅地が近いので、不可能である。そのようなことをすれば、とんでもない話が出てくると思う。対岸の馬路町側にあの施設が建っていれば、もっといろいろなアクティビティのコンセプトが考えられたのではないかと思う。あの場所では、駐車場も限られているし、観光バスも入れない。そのようなことを考えると、施設の位置がちょっと違ったのかと思う。市としても、指定管理になったとしても、建物の管理・修理を含めて、必要経費があるので、その分だけ出すのか、これから検討すると思うが、場所的なことを考えるといろいろな発想が狭まってくると感じる。代表理事にとっては、あそこの場所のほうが利用価値があるとおっしゃるかもしれないがどうか。

<豊田代表理事>

駐車場の件は、最初から懸案事項に上がっているが、整備できるのであれば、整備していただきたいと思っている。

ラフティングの乗り場は、しっかりとしたものはいらない。JR千代川駅のロータリーが使えるのであれば、乗降に使える。

対岸を使うのは、非常によいと思う。船を渡すこともできるし、渡し船などでもできるのでおもしろいと思う。そのように、今あるあの場所をどのように利用していくのか、いろいろとアイデアを出す必要がある。私どもが協力できることがあれば、させていただきたいと思う。

<木曾委員>

これから一生懸命企画を考えていただいて、あそこを生かしていけるように、効率よく管理・運営ができ、アクティビティがうまくのっていける企画になるアドバイス等を積極的にしていただきたい。管理等でここが一番大事なポイントであるということを含めて、しっかりアドバイスをいただき、お互いにうまく、あの施設を有効利用できるようお願いしたい。

<豊田代表理事>

あの建物は、障がい者用の更衣室とシャワー室があり、非常に先進的な建物であるにもかかわらず、車椅子が上り下りできるスロープがないのが疑問である。障がい者の方にも川遊びを楽しんでもらえるように、あの更衣室やシャワー室を完備していると考えられるので、コンセプトを一貫して整備してもらいたいと思う。

<赤坂委員長>

いろいろ聞かせていただいて、私も事業計画について心配している。航路を作るために、何年もかかると聞いている。指定管理されるとすれば、どこまで、費用を出してやっていくのかを出したほうがよいと思う。足りない部分はたくさんあると思う。アクティビティはいろいろ考えられるが、事業計画を立てる前にどこまでやっていけば、しっかりと進んでいくのか非常に心配である。「最低ここまでしてもらわないと、あの川は難しいんや」というところを最後に一言お願いする。

<豊田代表理事>

川の整備が一番大変であると思う。平川なので、重機でがばっと掘ることはないが、



重機を数日入れる必要があった。重機を入れて、今のラフティングボートが流れる航路を作るまでなら、100万円以内でできる。もし、アクティビティ事業でそれを補填できる収益があれば、川の整備はそれほど日数も必要ないし大変ではない。ただ、保津川下りのような船を流そうと思えば、もう少ししっかりとした川の整備が必要になってくる。川の流れにも照らし合わせて、流れる構造物の沈床を作ろうと思えば費用などもかかってくるので、その場合はご相談させていただきたい。クラウドファンディング的なこともできると思うが、いろいろなアイデアを出しながら120年前の保津川下りの船を復活させるのであれば、費用がかかってくると思っている。

<赤坂委員長>

昨年度はラフティング体験をさせていただき予定をしていたが、悪天候のため中止となったので、もし、今年体験させていただけるなら、委員会ですべてさせていただきたいと思うのでよろしくお願いします。

最後に奥野副委員長より閉会のあいさつをいただく。

#### 4 閉会（奥野副委員長あいさつ）

<奥野副委員長>

コロナ禍のお忙しい中、お越しいただき感謝する。いろいろと勉強させていただき、まだまだ課題が多いことも実感した。しかし、すでに建物は建っているので、京都府、亀岡市、議員が力を合わせて無用の長物にならないように頑張っていきたいと思う。また、市民には保津川の歴史を理解していただきながら、川下りを楽しんでもらう。そして、一過性でなくリピーターも取り込んでいける策を考えていく必要があると感じる。また、我々委員も力になれることがあれば、委員会としても頑張っていきたいと思う。行政も保津川遊船企業組合さんからご意見をいただきながら、亀岡のシンボルとなるように頑張っていきたい。今後ともよろしくお願いします。

11:01

[保津川遊船企業組合・産業観光部退室]

<休憩 11:01～11:05>

### 【産業建設常任委員会】

[上下水道部入室]

[上下水道部長あいさつ]

#### (2) 亀岡市上下水道ビジョンの策定について (上下水道部行政報告)

[総務・経営課長 資料に基づき説明]

11:20

## 【質疑】

＜赤坂委員長＞

収支の見直しについて、今後どのように節約していくのか。

＜上下水道部長＞

維持管理経費の削減は、ランニングコストや現金収支、今後の資金運営の上では、重要だと考えている。例えば、水道では、ポンプの運転時間の変動により、電気代の削減や配水池に水をためるのに、どの時間帯にためれば電気代が安くつくのか等の検討はしている。人口が減ってきて、使用水量が減ってくるので、今ある機械能力では過剰である場合に、交換時には機能を十分生かすものの安価で能力を発揮できるような機械に変える等、そのようなところで削減に取り組んでいる。今後もこのような見直しを図っていきたいと考える。

＜赤坂委員長＞

取り組むこともよいが、このようなことを削減していったら、最終これだけ費用がかかるということを出してもらいたい。

＜木曾委員＞

人口の動向をみていると、かなり減ってくることが分かり、下水処理も減っていくが、職員の数はシミュレーションしているのか。例えば、消化ガス発電を整備したことによって、そこに人員を配置するなど考えているのか。

＜上下水道部長＞

職員数の問題は、本編の29ページに記載している。過去10年間であるが、作る時代から維持する時代へとやっているが、過去10年間は作る時代で、職員数も多く、技術者も多くいた。近年技術者の人手不足で、事務職が技術職を賄ったりして、工夫している。作っていく上では人は減っているが、農業集落排水処理施設の統合等で維持・管理の人員を減らしていこうとしている。近年の災害や事故等に対応していこうとすると、ある一定の人員の確保は必要であると考えている。現状の収支見直しの中では、いつ人員を削減するかということろまでは、維持費の面では横ばいで計上させていただいており、今後の事業展開を見ながら、削減していくべきと考える。しかし、技術者が足りないので、人材育成をどのようにしていくかが課題である。

＜木曾委員＞

農業集落排水処理施設と統合することによって、結果として、公共下水全体のコストが上がって、負担を増やさざるを得ないとなったときに、全体的なバランスの中の収支を考えなければならない。総合的に見直し、経費を削減し、料金の値上げを抑制していかなければ、市民からの不満が出てくると考えるが、このビジョンの中にその辺りの記載はあるのか。

＜上下水道部長＞

概要版の5～6ページに示しているが、今後の目指す方向性として、市民の方に負担を求める前に、事業の洗い直しが必要であると考えている。職員の努力などで経費削減をしていく中で、市民の負担を求めていきたいと思う。

＜木曾委員＞

例えば、農業集落排水処理施設で、1軒だけ離れてあるような民家で、誰も住んでいなければ、管路の維持・管理も含めて、その辺りの整理をして管路の接続をカットしたりすることはできるのか。これからどんどん人口が減って、過疎化により農業集落排水処理施設は、特にその辺りの問題が出てくると思うが、対策を考えてい

るのか。

<上下水道部長>

施設や事業の統合は考えているが、過疎化による集落をどの事業に転換していくのかは、見越していない。今後考えていかなければならない問題であると思う。

<下水道課長>

遠く離れた民家であれば、管路を伸ばすよりも例えば、合併浄化槽で対応するなどして、経費の削減を図っていきたいと考える。

先ほど言われた、消化ガスについては、昨年12月から始めているが、民設民営でやっているの、直接職員をそこに配置することはない。

<藤本委員>

5ページの収支について、人口減少して、収益が減り、施設の老朽化のため、管理に莫大な費用がかかる。もともと人口12万人に対応できるような施設であるので、亀岡市民だけ使用するには、人口も減ってきて、水道の供給も減ってくるのもつたいない。近隣も考慮した上で、他市へ、水の供給・売却等を拡大する考えはあるのか。

<上下水道部長>

ご承知のとおり、今、南丹市への水道用水供給事業を進めており、今年度中には南丹市へ水を送っていく予定である。南丹市にとっては、施設更新の費用を削減されたし、亀岡市にとっては、人口が減ってきて、施設の余剰能力が出てきているので、収益に回すことができ、お互いに利益があり事業協力をさせていただいた。南丹市に聞くとよければ、まだ、亀岡市に余剰能力があれば、もう少しエリアを拡大していきたいという構想をもっておられる。南丹市とは、隣接しており、管がつながるので、どのぐらい使用いただけるか、亀岡市のマイナス分を少しでも収入にできればと思う。今後そのような申出があれば、協議していきたいと考える。

<木曾委員>

過去に計画があったと思うが、下水でも、例えば、八木町の分を年谷浄化センターまで管路をつないで処理することは、将来的に考えられるのか。

<下水道課長>

今の段階で計画はないが、これからは共同化と言われているので、年谷浄化センターの受入規模の容量によるが、まずは、地元の農業集落排水処理施設や特定環境保全公共下水道等を公共下水道に統合して、その後、余剰能力があり、お互いにメリットがあれば協議してやっていくということが、今後の課題であると思う。

<木曾委員>

収支の見通しについて、最終的に2045年にはこれだけのマイナスが見込まれているが、結果として、今のまま維持していけば、上下水道料金の負担割合はどうなるのかについて、シミュレーションを市民に知らせる必要があると思う。市民に事前に収支報告を含めて知らせるから、負担割合もお願いしていかなければならない。いきなり、2~3年前からばたばたと、料金を上げていくのでは話にならない。そのようなシミュレーションをしているのか。

<上下水道部長>

経営審議会の中でも、委員からご意見をいただいている。この収支を見て、将来的に資金が枯渇するため、料金改定が必要なことは見えてくる中で、「いつから手を打つのか」、「早く手を打ったほうがよいのでは」、「自己資金を確保していくことを検討すべきではないか」という一方で、「料金改定については、市民の理解が得られなければできないので、現状を地道に市民に分かりやすく説明していくことが

大事である」等のご意見をいただいている。

<赤坂委員長>

削減できる部分はたくさんあると思うので、毎年少しでも出して行って、「こんなにやったから、料金を改定させてほしい」というのが筋である。ここまでやったというところを作っていくべきである。そういうところを考えながら、いろいろと今後も報告いただきたい。

話は変わるが、昨日部長に連絡させていただいた、亀岡地区の東部中部を中心とする、配水系統の区域替えのことだが、それに対して、自治会に入っている人にだけチラシがいった。入っていない方がたくさんおられて、又聞きで分かっている状態である。それに対して、今後どのように改善していくのか。地域の皆さんの立場ならよく分かると思うが、工事されて、白い水が出てくれば、「なんやこれ」「きいてへんよ」となって、いろいろなクレームの電話が入ってくると思う。これは、早急に改善していかなければならないと思うがどうか。

<上下水道部長>

昨日、委員長よりお電話いただき、いろいろ貴重なご意見をいただいたところである。配水区域は水の流れを、北から南に送っていたものを、南から北に切り替えるため、濁りが発生するというお知らせである。その件については、広報として、昨日も委員長に報告させていただいたが、まず、東部地区・中部地区の自治会を通じて、全戸配布をさせていただいた。また、市のホームページやLINE、フェイスブックへの掲載を考えている。しかし、昨日委員長のほうから、「ご存じない方がおられる、どう周知するんや」というようなお話をいただいたので、昨日から今日にかけて、部内で協議し、改めて全戸にチラシを配布させていただいてはどうかということで、部内で今、班編成を組んで、検討させていただいている。改めて、上下水道部のほうからチラシを配らせていただこうと考えている。

<赤坂委員長>

できるだけ早くチラシを配布し、工事を進めていただきたいと思う。

11:41

[上下水道部退室]

[産業観光部・市長公室入室]

[産業観光部長あいさつ]

### **(3) ふるさと納税を活用したクラウドファンディングについて (産業観光部・市長公室行政報告)**

[担当課長 資料に基づき説明]

11:48

[質疑なし]

[市長公室退室]

11:49

#### (4) ウッドスタート事業について (産業観光部行政報告)

[農林振興課長 資料に基づき説明]

11 : 55

##### [質疑]

<菱田委員>

よい事業だと感じる。地元の木に触れる、香りを小さいときから感じ、知育だけでなく感性を高めるという意味でよいと思う。進めてもらうが、木工作家は亀岡市に何人おられるのか。

<農林振興課長>

かめおか霧の芸術祭などで調べたら、約7人おられたので、その方たちの意見を聞かせてもらいながら進めていきたいと思う。

<菱田委員>

なぜ、220万円の予算は、当初から上がってこなかったのか。企画が生まれた経緯を含めて教えていただきたい。

<農林振興課長>

環境森林贈与税が令和元年から始まっており、今までずっと基金に積み立てている状態になっていた。これを具体的に令和6年度から、森林環境税に変わっていく状況の中で、基金に積み立てていくが、市としてどのように使っていくのか、私が、農林振興課に来させていただいたときに、まだ十分、煮詰まっていない状況だったので、いち早くこうした事業に取り組んでいこうということで、今回6月補正で上げさせていただく予定である。できるだけ早くスタートできるようにやっていこうと思っている。

<菱田委員>

松本課長の提案と聞こえたが、よい事業だと思うし、今まで、森林環境贈与税は、どちらかという山の所有者にお返しするという形でお願いしていたが、広く市民の方に、幼少期から使ってもらえるのはよいことだと思うので、今後もうまく展開をしていっていただきたい。

<農林振興課長>

私の発案と言っていたが、第5次亀岡市総合計画の市民の提案に、この事業が入っていたので、そのようなところをくみ上げさせていただいた中で、協議をさせていただいた。

本来の森林環境贈与税の事業は、人工林を間伐していく事業がメインであり、その部分も大事であるが、森林を知っていただくという両輪でこの事業を進めていったほうがよいということで、今回予算を上げさせていただく。

<藤本委員>

先日、森林について現地視察に行かせていただいて、このままでは大変だと感じた。しかし、木材を売ってもお金にならないということで、森林環境贈与税を大いに基金に積み立てて活用いただきたいと思う。

以前、JR亀岡駅に木のベンチを置いていただいたが、今後公共施設等に木工作家に協力いただいて、市民が活用できるようなベンチの設置などにどんどん広げていっていただきたい。

<産業観光部長>

これから、亀岡市は環境先進都市として進めていこうとしている中で、山・森林は大きな環境の政策になるし、脱プラスチックにもつながっていくので、いろいろと森林の政策を考える中で、適切な事務をしていきたいと思う。今後ともよろしくお願ひする。

<小川委員>

木育インストラクターとは何か。

<農林振興課長>

木を使った遊びをしていく等、森林に興味のある方に声をかけて、いろいろな活動をしていただける場を提供していく中で、リーダーになっていただける人を育てていき、NPOが木育インストラクターの認定をしていく。

<小川委員>

子育ての関係部署と連携を取って、根づくような事業にしてもらいたい。

<赤坂委員長>

中途半端なことにならないようにしていただきたい。森林や里山の保全ができていない状況なので、これからしっかり協議をしていかなければならないと感じる。森林整備もしっかり考えながら、ウッドスタート事業を進めていっていただきたい。

12:03

### 【3 その他】

#### (1) 委員会テーマについて「地域経営活動の再生及び農林振興の具現化」

<赤坂委員長>

委員会テーマについて、前回、出していた意見をもとめた。今後は、委員会テーマを「地域経営活動の再生及び農林振興の具現化」として、活動していくのでよろしくお願ひする。

(了)

#### (2) 現地視察・行政視察について

<赤坂委員長>

緊急事態宣言が出ているので、府内の近場で森林等の行政視察を行いたいと考えている。先日、日吉町森林組合の方にいろいろお話しを聞いた中で、「いつでも来てください」と言っていたので、近隣なので、連携しながらできると言っておられたので、視察に行きたいと考えている。今年、行政視察の遠出は無理だと思っているので、できるだけ近場で行ければと考えている。

<藤本委員>

以前言っていた、丹波篠山市の城下町の無電柱化も視察に行ければと言っておられたが、どうなったのか。

<赤坂委員長>

それも行ければと考える。

#### (3) 次回の日程について

<赤坂委員長>

今回は、6月22日(火)、午前10時から、6月議会の議案審査となるのでよろ

しく願います。

散会 ～12:08